

# 『源氏物語』の教育学的考察 その六

——旅における人間形成をめぐって——

尾田綾子

## An Educational Study of "The Tale of Genji" VI

——as regards the formation of personality through travel——

Ayako Oda

### はじめに

『源氏物語』が書かれたと推定される十一世紀の王朝国家の時代は、律令公民法制が解体し荘園制が発展した過渡期であった。<sup>(1)</sup> 中央政府・朝廷の地方政治への関与は後退し間接的な支配に移行していったから、中央貴族達は地方への関心を失い、都で栄華を誇る暮らしに埋没していった。そこから京と田舎、都と鄙、みやびとひなび等、中央と地方がはっきりと区別され、価値観・美意識までもが当然のこととして差別を生じるようになっていったのである。

『源氏物語』は幼くして一条帝の宮中に入内された中宮彰子を教育する為に意図的に書かれたものとして筆者は考察を続けているが、こうした時代背景を視野に入れることで、物語世界が中央の宮廷貴

族社会にのみ限られている理由が了解されるのである。

それにしても、『源氏物語』の作者紫式部は当時の受領階級の家柄の者として、二十代に、越前の守に任ぜられた父藤原為時に従って、長徳二年（九九六年）に越の国に下っており、それ以外には長途の旅に出た形跡が見られないので、物語の中に旅の場面を取り入れることがあれば、この時の経験を語りそうなものの、越の国行きで得たであろうと思われるものは何も語られていない。ということ、『源氏物語』は執筆目標が明確に決まっているから余計なものは何一つ語らないということが考察される。

それでは、『源氏物語』の中の「旅」の場面はどのような意図をもって構想されたものであろうか。そして、それが教育という人間形成の営みにどのように係わってくるものなのであろうか。ということが問題になる。この小論は以上の問いについての試論である。

## 一 王朝期の旅の種類とその功德

王朝の昔「たび」という用語は「住みかを離れて一時よそへ行くこと。古くは必ずしも遠方に行くことをいわず、住みかを離れることをすべて旅という」——岩波古語辞典——と説明されているように、旅寝・旅所・旅住みなどと言っても普段と違った場処で一夜を過ごすことで、たとえ自分の家の近くであつても旅先なのである。

但し、この時代の若者は「通い婚」が慣習であつたから「住みか」と言つても自分の家だけではなく、妻や懸想人の許で一夜を過ごすこともあり、これは勿論「旅所」とは言わない。

又、しばしば宮中に宿直して泊まっているが、これも日常の仕事であるから「旅寝」とは言わない。

日常生活とは異なる「旅」を『源氏物語』の中に求めると、次の四型に分類される。

## (一) 方違え

これは陰陽道の用語であり、物忌み・夢合わせ・厄年 お祓いといった古代中国の陰陽道に由来する事象と共に『源氏物語』の中では数多く語られている。「外出の際に、行き先に天一神なかがみがいる場合、その方向を避けること。前夜に別の方角へ行き一泊し、方向を変えて目的地へ行く。(かたがへ)の客を迎えた家では、もてなしをするのが普通であつた」——詳細古語辞典——とある。

暗くなるほどに「今宵 中神 内裏うちよりはふたがりてはべり

けり」と聞こゆ。「さかし、例は忌みたまふかたなりけり」「二条の院も同じ筋にて、いづくにか違へむ。いとなやましきに」とて大殿籠れり。「いとあしきことなり」と、これかれ聞こゆ。「紀伊の守にて親しくつかうまつる人の、中川のわたりなる家なむ、このころ水せき入れて、涼しきかげにはべる」と聞こゆ。「いとよかなり。なやましきに、牛ながらひき入れつべからむ所を」とのたまふ。忍び忍びの御方違へ所は、あまたありぬべけれど、久しくほど経て渡りたまへるに、方塞かたふさげて、ひき違へたがほかざまへとおぼさむは、いとほしきなるべし。——「帚木」——<sup>(3)</sup>

五月雨が降り続き、久しく宿直し続けていた後、久々に婿として左大臣邸の葵の上のもとに退出した源氏の君は、夜遅くなつてから、方塞りであつたことに気づき、家来筋の紀伊の守の許へ方違えをした時の場面である。急なことで紀伊の守は迷惑がり、父の伊予の守の女達も方違えに來合せていて、狭く、失礼があつては困ると心配するのを聞いて「その人近からむなむ、うれしかるべき、女遠き旅寝は、もの恐ろしきこちすべきを」と源氏はよろこび、紀伊の守がお迎えした一行を「貴人は随人、供人を数人連れて移動する」もてなそうと御馳走の支度に忙しくしている間、昨夜の「雨夜の品定め」で論議された中流貴族の個性的な女性との偶然の出逢いを期待しているのである。

こうした方違えなどの経験を通して、人々が、自分の日常と異なる生活に触れ、新しい発見や、反省を持ち、人生の幅を自ずから広げてゆくことに物語はさらりと触れて、巧みに次の場面へと筋の展開を計っていることがわかる。

## (二) 参籠

神社・仏閣に詣で、祈願・願解がんげきする儀式的な行為は、男性・女性とも度々行っており、外に出ることの少ない王朝貴族の生活に於いては公然たる旅の目標となる。靈験あらたかな神仏は古代からの由緒あるものが多いから、都市から離れた聖域に鎮座しますることになり、又、厳しい修験道を伴って自然の聖域を占めているから、神仏信仰は苦勞の多い泊まりがけのものになることが多い。

瘡病わづはやみにわづらひたまひて、よろづにまじなひ加持など参らせたまへど、験しるしなくて、あまたたびおこりたまへければ、ある人「北山になむ、なにがし寺といふ所に、かしこき行ひ人はべる」……中略……御供にむつまじき四五人ばかりにて、まだ暁におはす。

——若紫——

「うちつぎては、仏の御なかには、初瀬なむ、日の本のうちには、あらたなる験しるしあらはしたまふと、唐土もろこしにだに聞こえあんなり。ましてわが国のうちにこそ、遠き国の境とても、年経たまひつれば、若君をばまして恵みたまひてむ」とて、出だしたてまつる。ことさらに徒歩とほよりと定めたり。ならはぬここに、いとわびしく苦しけれど、人の言ふままに、ものもおほえで歩みたまふ。いかなる罪深き身にて、かかる世にさすらふらむ……中略……とりかへしいみじくおほえつつ、かろうじて、椿市つばいちといふ所に、四日といふ巳の時ばかりに、生けるこちもせで行き着きたまへり。

——玉鬘——

こうした「苦勞」「難行」によって、より大きな利益りやくを得たい氣持が働いているのであろうが、それだけに一層日常性からの脱出であり、驚き、好奇心など精神の高揚が期せずして満たされることになる。物語はこうしたことに気づくよう語られている。

## (三) 律令国司の任地往復

王朝国家は支配層である中央貴族と、地方を治め国費としての公納物を集める国司とから成り立っていた。国司の任期は四年であり、任用された国司は都から大勢の妻子・家人を引き連れて任地へ赴くのを常とした。国衙こくが（国司の役所）に於いて、この中央から派遣された国司を——国の収入を受領する者の意で——受領うりやうと言ひ、現地任用の国司は郡司として様々の肩書きで国務に従事していたから、都での豊かな文化生活に慣れ親しんだ受領達は在任中에서도しばしば代理人（目代もくだい）を置いて都に帰って来た。——中には、中央貴族と連携し高官の保証を得ながら在地公領を莊園化しつつ私腹を肥やす者も現れて来た。——この都と任地先との往復の間は、旅路・旅先である。

……いかならむをり、と待ちわたるに、紀伊きいの守、国に下りなどして……

——「空蟬」——

……おぼすほどに、伊予いよの介上すけあがりりぬ。まず急ぎ参れり。〈先ず源氏の邸にご挨拶に寄つた〉船路のしわざとて、すこし黒みやつれたる旅姿、いとふつつかに心づきなし。されど人もいや

し・か・ら・ぬ・筋・に、容貌などねびたれど、き・よ・げ・に・て、ただならず、け・し・き・よ・し・づ・き・て・などぞありける。国の物語など申すに……

——「夕顔」——

……心ばえなど、はた、埋れいたきまでよくおはする御ありさまに、心やすくならひて、異なることなきなま受領などやうの・家・い・あ・る・人・は、ならはずはしたなきこちするもありて、うちつけの心みえに参り帰る。

——「蓬生」——

旅先で国司やその家族達は地方文化に目を開き、自己のアイデンティティを自覚すると共に、何らかの影響を身につけて都に帰って来れば、今度は鋭敏・繊細な都人達から「いとふつつかに心づきなし（ぶかつこうで嫌な感じだ）」など鄙びの姿を感知され軽蔑されることになるが、こうした経験を重ねて受領階級の女性は個性豊かな人物に育てられたのであろう。

更に、旅の途上では、風景の美しい処々で心を楽しませることも多かったと思われる。

お・も・し・ろ・き・所・々・を・見・つ・つ、心若うおはせしものを、かかる道をも見せたてまつるものにもかな…… ———「玉鬘」———

これは幼い玉鬘姫を擁して筑紫へ下る船路での女房達の思いであるが、行方不明になってしまった母親の夕顔が若く好奇心が強かったから、こうした旅に出られたらどんなにか喜ばれたことであろうお連れしたかったと残念がっているのである。

そうであれば、旅の途上で「歌枕」に語り継がれた名勝の地を目前にする幸いはひとしお感極まるものであったかと思われる。

もともと「歌枕」は地方の単なる地名に過ぎなかったのだが、大嘗祭に際して、地方の中から「悠紀」・「主基」の国が選ばれ、選ばれた地方は国々に伝わる風俗歌を奏上した<sup>(4)</sup>。この風俗歌にはその地名が始めの一句に詠み込まれる定めがあつて、この地名が宮廷という公の場で公認されてゆき、そして次第に形式的に定められて、やがて勅撰私歌集の歌枕名所として承認されるようになり、更にその地名としての本来的な景物や心象が付け合わされるといふ高度な内容を伴った歌詞となったのである。例をあげると、

宮城野の露吹きむすぶ風（おと）の音に小萩（こはぎ）がもとを思ひこそすれ

——「桐壺」——

「宮城野」は和歌の最初（頭）に詠まれた地名なので「歌枕」。宮城県仙台市の東にある野で萩の名所。従って「宮城野」といえば萩（景物）の名所としての「歌枕」であり、更に、「萩」の花の繊細な枝葉に宿る「露」（心象）は涙を暗示する。ということになるのである。

ついでまでに一首を解すれば、ここでは「宮城野」は「宮中」の意味に重ねて使われており、「小萩」は「子」の意味で、宮中に吹く秋風の音を聞くにつけ涙をもよおし、離れている子供のことを心から心配し思いやつているという意味に受け取れる。桐壺帝が桐壺更衣亡き後、里邸で祖母に育てられている幼い光源氏の君を思いやつての歌である。

このように「歌枕」は公的に認められた約束の付け合わせを含ん

だ歌詞であり、あくまでも宮中で制度化されたものであるから、伝統的なものとして伝承されてゆく。

よろづの草子・歌枕 よく案内知り見尽くして、その言葉を取り出づるに、詠みつきたる筋こそ、強うはかわらざるべけれ

——「玉鬘」——

というのは、古代の歌風をいつ迄も固持する末摘花の古風を批難する源氏の君の言葉であるが、ここに「歌枕」が伝統的に確立していたことがわかるのである。

さて、歌枕の地はこうして日本全国に広がり、古来名勝の地とされ、多くの旅人が立ち寄り、感慨を歌に詠み、その名歌を識ることで更に多くの人々が日本人の心を——美しい自然とそれをしみじみあはれなりと味わう心を深めてゆくことになるのであるが、その名勝の地を現実に見前にする悦びと、歌枕の地名を列挙して（源氏物語中の和歌の総数は七九五首、その中、歌枕を含む歌一〇八首）知らしめることを『源氏物語』は自ずから行っていると考えられる。

更に、物語の地の文の中に、作者は「歌枕」をさりげなく挿入しているが、その歌詞を詠んだ知名度の高い歌を思い出し、この「引き歌」によつて一段と感慨を深める効果をもたらしめている。

難波の御祓へなど、ことによそほしうつかうまつる。堀江のわたりを御覧じて、「今はた同じ難波なる」と御心にもあらずうち誦じたまへるを、御車のもと近き惟光、うけたまはりやしつらむ、さる召しもやと、例にならひて懷にまうけたる柄短き

筆など、御車とどむるところにたてまつれり。をかしとおぼして、畳紙に、

みをつくし恋ふるしるしにここまでも

めぐり逢ひけるえには深しな (源氏)

数なくてなにはのこともかひなきに

などみをつくし思ひそめけむ (明石)

右の二首の唱和は「今はた同じ難波なる」に呼び覚まされての応答であり、「わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はむとぞ思ふ」——古今六帖——と身を焼く恋の熱情のロマンチズムをお互いに肯定し合つた上での分別である。こうした歴史的伝統的文化の中にある「思い」の中に、この瞬間の我が身の「思い」を重ねることで人生の味わい、人生観を深めることも歌枕の効果である。

#### 四 流 離 謫 居

『伊勢物語』の在原業平、その兄の行平卿、菅原道真公など、政治の世界では常に政争が耐えず、失脚した者は都から追放される。道真のように表向きは九州太宰府の長官であっても、地方へ行く筈の無い者が任命されれば謫居である。たとえ家族同伴であっても、<sup>みだひと</sup>都人との交際は絶たれ淋しいこと限りない。ここに、別離の情がかき立てられ、あはれを催す歌が詠まれ、人生の無常を深く実感することになる。

日本の物語の典型的類型の一つとして、貴種流離譚——① 貴い生まれの者が② さまざまの艱難辛苦の試練を経て③ めでたしめでたしとなる——という話型があるが、この②の段階で人間性が

鍛えられ、真価を問われることになる。『源氏物語』の中では、源氏の君の須磨謫居と、玉鬘姫の筑紫流離がこれに当たる。

「須磨」の巻では和歌が四十八首も詠まれているが——これは『源氏物語』五十四帖の中で和歌の数が最も多い巻である。——人生に於いて別離がいかに哀切の情を催すかということを示している。不安だ、淋しいというものだけでなく、互いに相手を思いやる優しい気持が自覚されていることにも気付かせられる。

身はかくてさすらへぬとも君があたり

去らぬ鏡の影は離れじ (源氏)

別れても影だにとまるものならば

鏡を見てもなぐさめてまし (紫上)

月かげのやどれる袖はせばくとも

とめても見ばやあかぬ光を (花散里)

ゆきめぐりつひにすむべき月かげの

しばし曇らむ空ながめそ (源氏)

逢ふ瀬なき涙の河に沈みしや

流るるみをのはじめなりけむ (源氏)

涙河うかぶ水泡も消えぬべし

流れてのちの瀬をも待たずて (朧月夜)

## 二 『源氏物語』における旅の展開

『源氏物語』の中で旅先として考えられる単なる地名としての土地を挙げれば、およそ全国に及んでいるが、印象深く場面を描き出すように語られている場処を取り上げると、先ず、北山（鞍馬）、須磨・明石、筑紫ということになるであろう。前二場は光源氏の経験、後一場は玉鬘姫の経験として語られているが、どういう事か、どのような視点から語られているかに注目しながら、物語の筋を辿ることにする。

### (一) 京都北山への旅

先にも触れたように、光源氏の君は十八歳の春、瘡（わづり）の病を加持祈禱で癒してもらおうと京都の北山（鞍馬山）に住むの聖（ひじり）の岩窟に登って行く。都の春は終わったのに、此の山奥では今、山桜が美しく満開である。山奥へと分け入るにつれて、夜も明けはじめ霞のたたずまいが面白く、このような遠出をしたことのない貴公子には、すべてが珍しく興味深く思われる。聖の加持祈禱を受けてから、後の山に登って京都の町並みを見降すのも趣き深く「絵にいとよくも似たるかな」など都人らしい発言をしたり、「かかる所に住む人、心に思に残すことはあらじかし」と、美しい景色の中で暮らすことへの憧れを口にする、供人の中から「この地はまだまだ平凡です。地方にある海や山の景色をごらんになりましたら、どんなにか素晴らしい絵をお書きになることでしょう。富士の山、なにがしの嶽」などと言う者や、西国の浦や磯の素晴らしい美しさを語って慰め申

し上げる者も居る。「近いところでは、播磨の明石の浦が素晴らしい。特別なことはないが、海の面を見わたすと他では見られないゆつたりとした感じがします」などの会話を交えて生活者には気付かれない美を觀賞する者の立場が意識化されている。そして話しは前明石守の娘のおかしな結婚願望へと続く。

その後、源氏の君は暇にまかせてあたりを散歩して、藤壺中宮によく似た女の子を見出し、やがて、その子の身の上を後見役の僧都から聞くことになる。源氏の君は是非ともこの子を自分の手許で育てて理想の女君に仕上げたいと願うようになる。「山紫水明」の語源は未だにわからないが、紫の上と明石の御方という源氏に深い係わりを持つ女性達を、この春の美しい北山で始めて語り出していることは興味深い。

初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖も露ぞかわかぬ

(源氏)

枕ゆふ今宵ばかりの露けさを深山の苔にくらべざらなむ

(尼君)

暁方になって、法華懺法を行う声が山おろしの風に乗って聞こえてくるのが滝の音に響き合って尊く感ぜられ、夜明けと共に、霞の間からの山鳥のさえずりも楽しくなり、名も知らぬ草木の花が一面に咲き乱れる中を鹿がたたずみ歩いているのを見たりしているうちに、源氏の君は「なやましさもまぎれ果てぬ」と気分が良くなれるのである。聖の護身の術の効験もあるのであるが、美しい大自然に包まれて時を過ごすことの健康恢復力の確かさを反省させられ

る一文である。続いて、都から後れ馳せにやって来た迎え人達と共に、花の樹下での宴が開かれ、酒を酌み交わし、和歌を詠み合い、土産物を交換し、音楽を奏し、一同感極まるという、千年後の今日のお花見にも通じる催しが始まるのである。

以上のように話の筋とは別に、若い貴公子の鋭敏な感性に受け止められた日本の春の美しい自然が北山への旅の中で展開されているのである。

## (二) 須磨・明石での謫居

政敵右大臣家の六の姫、朧月夜との恋愛に躓き、潔く都から離れ須磨の海辺に退いた源氏の君は、都人との別離の悲しみ、親しく話す相手のいない孤独の苦しみ、前途の不安など、侘しい流謫の日々の中で、心慰められるものとして、絵に書き残したいほどの須磨の海辺の美しさ、普段は気づかれない人々の情の厚さをしみじみと経験されたのである。

おはすべき所は、行平の中納言の、藻塩垂れつつわびける家居近きわたりなり。海づらはやや入りて、あはれにすごげなる山中なり。垣のさまよりはじめてめづらかに見たまふ。茅屋ども、葦ふける廊めく屋など、をかしうしつらひなしたり。所につけたる御住ひ、やうかはりて、かかるをりならずは、をかしうもありなましと、昔の御心のすさびおほし出づ。

須磨には、いとど心尽くしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の関吹き越ゆると言ひけむ浦波、夜々はげにいと

近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。

『源氏物語』の中で「名文」と呼ばれる箇所は多々あるが、右の文章はその中の一つである。人はしみじみと心の底からの深い美的感動を受けた時、その思いを言葉で表すとなれば、やはりしみじみと静かに相手に訴える調子の文章になるであろう。

御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、ひとり目をさまして、枕をそばたてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここともに立ちくるこちして、涙落つともおぼえぬに、枕浮くばかりになりけり。

こうした涙、涙の淋しい日々の中、音楽（琴をかき鳴らし）と絵画（絵日記）が慰めであったが、更に心を慰めたのは人情である。

前栽の花、色々咲き乱れ、おもしろき夕暮れに、海見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふ御さまの、ゆゆしうきよなること、所からは、ましてこの世のものと見えたまはず。白き綾のなよかなり、紫苑色などたてまつりて、こまやかなり御直夜、帯しどけなくうち乱れたまへる御さまにて「釈迦牟尼仏弟子」と名のりて、ゆるるかによみたまへる、また世に知らず聞こゆ。沖より舟どもの歌ひのしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮べると見やらるるも心細げなるに、雁の連ねて鳴く声、楫の音にまがへるを、うちながめ

たまひて、涙のこぼるるをかき払いたまへる御手つき、黒き御数珠に映えたまへるは、故里の女恋しき人々の心、皆なぐさみにけり。

源氏物語の中の和歌は、恋人との唱和、宴会の儀式歌などが普通であるが、須磨謫居の暮らしの中で主従が互いに思いやりを持ってふと歌い合ったものが書き残されているのに心惹かれる。

初雁は恋しき人のつらなれや旅の空飛ぶ声の悲しき（源氏）

（初雁は恋人達の仲間なのか、空飛ぶ声がとても悲しい）

かきつらね昔のことぞ思ほゆる雁はその世の友ならねども

（良清）

（次々と昔のことが思い出されます。雁は昔の友ではありませんが）

心から常世を捨てて鳴く雁を雲のよそにも思ひけるかな

（大輔）

（自分から故郷を捨てて空を飛ぶ雁を私はよそごとと思って聞いていました）

常世出でて旅の空なるかりがねも列に遅れぬほどぞなぐさむ

（右近尉）

（故郷の常世を捨てて旅の空を飛ぶ雁も仲間がいるから慰められる）

この連作に見られるように

○敬語を使わないこと（歌の世界では身分を問わない）

○相手の使った言葉（一座の中心の言葉）を繰返し使うこと。

○穏やかに個性ある自己主張を歌い上げること。

○短い詩型なので論理や説明ではなくイメージで表現すること。



和歌の創作にはこのような不文律が働いて仲間の和が保たれたものと考えられる。

### (三) 玉鬘姫の旅

夕顔と頭の中將との間に生まれた姫君は、母夕顔に連れられて身を隠している間に、夕顔が源氏の君との秘められた恋情の中で亡くなり独り残された。三歳の時、乳母の夫が大宰少貳(太宰府の次官)になり任地に赴くのに従って筑紫まで流離する。当地で乳母の一族に大切に育てられたものの、小貳が病死し、遺された者達では帰京できず、二十歳になるまで肥前で暮らした。美しい姫君に土地の男達が求婚したが、乳母は何としても姫を都で幸福に暮させたいと願い、ぐずぐずしている間に、土地の豪族大夫の監(げん)に迫られ、何もかも放り出して都へ逃げ帰って来た。都での父との再会は儘ならず、致し方なく開運を願っての寺社巡りがはじまった。

物語の全体的構想の中では、尚侍という宮中最高の優雅な地位に田舎育ちの姫が一年足らずで就任するという成功譚であるが、この物語の中には、明るく聡明な玉鬘姫の性格と相俟って、素朴な信心深い乳母一族の姿がほほえましい。当時の人々はすべてそのようであつたのであるが、九州に行く時も、帰る時も、京に帰ってから寺社参詣にはげむのである。作者紫式部はどうやら意図的に寺社名を並べたものと考えられる。

母君の御行方を知らむと、よろづの神仏に申して、夜昼泣き恋ひていさるべき所々を尋ねきこえけれど、つひにえ聞き出です。

金の御崎過ぎて「われは忘れず」※など世ともの言種(ことぐさ)になりて……。

(引歌) ちはやぶる金の御崎を過ぎぬとも我は忘れず志賀の皇神

「いかさまにして、都に率てたてまつりて、父大臣に知らせたてまつらむ。いときなきほどを、いとらうたしと思ひきこえたまへりしかば、さりともしもおろかには思ひ捨てきこえたまはし」など言ひ嘆くほど、仏神に願を立ててなむ念じける。

天下に目つぶれ、足折れたまへりとも、なにがしはつかうまつりやめてむ。国のうちの仏神は、おのれになむ靡(な)きたまへる君にもし心たがはば松浦なる鏡の神をかけて誓はむ

年を経て祈る心のたがひなば鏡の神をつらしとや見む

年経つる故里とて、ことに見捨てがたきこともなし。ただ松浦の宮の前の渚(なぎさ)と、かの姉おもとの別るるをなむ、かへりみせられて、悲しかりける

「神仏こそは、さるべきかたにもみちびき知らせたてまつりたまはめ。近きほどに、八幡の宮と申すは、かしこにても参り祈り申したまひし松浦、宮崎、同じ社なり。かの国を離れたまふとても、多くの願立て申したまひき。今、都に帰りて、かくなむ御験を得てまかり上りたると、早く申したまへ。」

「うちつぎては、仏の御なかには、初瀬なむ、日の本のうちには、あらたなる験あらはしたまふと、唐土にだに聞こえあんなり。ましてわが国のうちにこそ、遠き国の境とても、年経たまひつれば、若君をばまして恵みたまひてむ

以上引用した原文に見られるように、身の安全を願い、運命を切り開く力を得るための神詣での語が印象的である。鐘の崎の宗像大社、筥崎の八幡宮、松浦の鏡の神、等々の御祭神は、いずれも古事記に記された神々であり、併わせて神功皇后の御名が刻まれている。北九州海浜の地にあるこれらの社の神々は、外国（とくに）に対する大和の国の守り神であり、同時に、唐土・高麗の文明文化はこの地を経て京の都に貢献されるという仲介の地の守り神でもある。宮中に入内して皇族になられる姫君や、尚侍（なしのかみ）として朝廷に奉仕する者にとって、古代からのいわれのある神社の知識は身につけておくべき必要事項でもある。紫式部は意図的にこのような神社信仰を物語の中に配したと考えられる。

筥崎八幡宮と深く係わりのある京都の石清水八幡宮や、源氏の君・明石一族が深く信仰した海の守り神の難波の住吉大社も神功皇后を祭神として祭っている。この古代の社が今日なお昔のままの土地に在り、参詣人が跡を絶たないほどの賑わいで、信者に心のゆとりと救いを与え続けている現状を目の当たりにすると、紫式部が教育者として歴史的真相を確実に把握していたことに驚嘆する。

### おわりに——旅情の教育的意味——

以上の考察により『源氏物語』に於いては「旅」の物語にも人の心を豊かに育てようとする教育的配慮がなされていることを確認した。

日本の国土には至るところに美しい景観が散在しているが、旅をする上で先ず「美しいもの」に心を向けること、次に「神々の世界」として聖なる土地に身を置き謙虚な心で受け入れることが学ばれる。悟りを啓いた者には、自然界のすべてが美しく見えるのであるが、幼い者の心を育ててゆくには段階を踏まなくてはならない。清らかな大きな自然に包まれて、始めて人の心は自ずと同化し清められ素直なものに育つてゆくのである。明石の海が「ゆおびかに」ゆつたりと輝けば、私の心もそうありたいと自然に思い、須磨の浪風が心細く悲しく耳に響けば、我々の存在の有限性をさもありなんと自覚に迫られる。波おだやかで島々が偏在する瀬戸の内海。リアス式海岸線に囲まれた浜に立てば——遙か彼方に大空と大海原が一線を劃して水平線を造るという風景ではなく——青く湛えられた水の向こうに島・山が次々と重なり合い、入江を抱き包みこんでいるような北九州の津々浦々。明晰な言葉で捉えられた宗教を持たない日本人であつてみれば、こうした美しく奥深い自然の地に神の社を建てることで、靈魂——生命の根源——の世界を意識し、無限の時間性・空間性の中で、この一時を過ごす浄福感を持ち続けて来た日本文化の在り方が次第に無意識の心の深層から受け入れられるようになると考えての『源氏物語』の旅の話であつたと理解されるのである。

付記―筑紫へは行ったことのない紫式部ではあるが『紫式部集』

に依れば、手紙をやりとりしていた親友が筑紫に行っており、夫藤原宣孝は九九〇年（正暦元年）八月三十日に筑前守に任ぜられ、九九五年まで任に就いている。そして、紫式部と結婚生活に入っていた九九九年（長保元年）十一月豊前国宇佐神宮の奉幣使に任ぜられ、長保二年二月に帰京しているのである。

こうした身近な者から得た情報で物語の旅先の場面を語ったと考えられる。今回この小論を纏めるに当たって、近畿から北九州までゆかりの地を廻り再確認してきたが紫式部が各地の風土・風光を適切に捉えているので改めて驚きを感じたものである。

注

- (1) 王朝期の歴史に関しては① 日本歴史四 古代―岩波書店刊―（国司にたいする郡司・百姓の抗争・北山茂夫）
- ② 古代国家の解體 林屋辰三郎著―東京大学出版会（平安京における受領の生活）を参考とする。
- (2) 紫式部に関しては『紫式部』藤田孝範著 東京堂出版『紫式部』今井源衛著 吉川弘文館などを参考にした。
- (3) 源氏物語の原文は、新潮日本古典集成『源氏物語』に依る。
- (4) 歌枕に関しては『源氏物語講座五『時代と習俗』』の中の佐佐木忠慧氏の論文を参考にした。